

## 「ネット世代な私たち～リア充とネット充～」

田中 ※※  
※※ TANAKA

中京大学現代社会学部現代社会学科  
学籍番号 C11・・・・

### 1. はじめに：研究主題（私の関心）

まず、「ネット世代」とはなにか。それは、物心ついたときからネットがあった若者のことをいう。ネットが普及しだしたのは1990年代なので、1991年・1992年生まれの私たちもちょうどネット世代にあてはまる。いまやネットが私たちの生活に根ざしている現代において、ネットがないと不便を感じる、困る、または生きていけないなんて思っている人も多くいるだろう。

また、ネットが普及するにあたり、様々なサービス・仕組みが生まれた。その代表的なものがSNSだ。モバゲー、GREE、Twitter、mixi、Facebookなど現在もユーザーが増え続けている。これに従い、ネット依存症の人が増えたように思う。ネット依存症の例をTwitterで挙げると、暇になるとTwitterを見る、投稿する（つぶやく）、頻繁に見ないとどんどん流れに遅れていくとを感じる、などがある。SNSのほかにもブログや2ちゃんねる掲示板の閲覧・投稿をする、ニコニコ動画やYouTubeで動画を見て暇をつぶしたり、Skypeで会話やチャットをしたりと、ネット依存の種類はさまざまである。私自身もそんなネット依存症の1人だ。

そこでいつも思っていることがある。それはなぜあえて誰でも見ることができるネット上に自分の感情をさらけ出すのか、ということだ。そこで、ネット上にはなにか特別な魅力があるのかを追究していきたい。

また、近年言われているリア充についても考えたい。リア充はリアル（現実の生活）が充実している状態、ネット充はネット上の生活が充実している状態のことをいう。私の中では、ネット充の人はずっとパソコンを触っていてコミュニケーション不足なのではないかというイメージだった。だから私はリア充とネット充は正反対だと思っていた。しかし、研究を進めていくうちに、実は双方が近い存在であるかもしれない気が付いた。これから話を進めていくなかで、リア充とネット充の関係について深く論究していこうと思う。

### 2. ネット普及の背景

本題に入る前にまず基本的な情報を整理してみる。

#### （1）ネットが普及するまで

1985年…日本、通信自由化。通信開放によりパソコン通信サービスが始まる。また、これ以前は規制されていたインターネットの電子メールの交換が行えるようになった。

1980年代後半…1200bps～2400bps の電話モデムが登場。

1988年…日本、ISDNサービスを開始。デジタル通信サービス。

1989年…WWW（world wide web）の登場。1990年代前半頃からインターネットの世界的な普及がはじまる。

1990年代前半…9600bps～14400bps の電話モデムが登場。

1990年代後半…日本、携帯電話の普及が本格化。

1990年代後半…世界的にデジタル携帯電話の普及がはじまる。

1990年代後半…インターネットのホームページが急速に増加。

2000年代前半…日本、ADSL方式によるブロードバンドインターネットの家庭への普及がはじまる。Mbps級の通信環境が業務用だけでなく家庭でも使用されはじめた。

2000年代前半…世界でインターネットラジオ放送局が出現しはじめる。

2003年…IEEE 802.11を用いた無線LAN機器が本格的に出現しはじめる。

2000年代後半…インターネットを用いた動画配信サービスが本格的に出現。

2006年…この頃、世界の携帯電話の出荷台数が年間10億台近くになった。世界人口の約1/6から1/7の規模。

2006年4月…日本、ワンセグ放送の本放送を開始。主に携帯機器など移動体を対象にしたデジタルテレビ放送。

2008年7月…iPhone 3Gが日本で発売、徐々にスマートフォンが普及し始める

この年表からわかるのはパソコンでのネットが普及し、それから携帯電話でもネットが使えるようになったということだ。この技術の進化は、携帯電話が身近なネット世代にとって大きな影響を与えたのだと思う。また、インターネットの世界的な普及が1990年代前半頃なので、まだまだ歴史は浅いことがわかる。

(2) インターネットの普及 (<http://www.nikkeibp.co.jp/archives/389/389242.html> より)

総務省の調査によれば、インターネットの利用者は、昨年末で8000万人近くに上り、普及率も6割を超えた。1997年にはわずか1割だったのに比べ、7年間で6倍にも増えたことになる。なお、2001年と2004年について、年代別にインターネット利用率を比べたところ、60歳以上の高齢者の利用率が2.43倍と大幅に増加していたのも注目される。

(3) ネット依存症の社会的問題 (<http://www.nikkeibp.co.jp/archives/389/389237.html> より)

インターネット人口が爆発的に増加している一方で、「インターネット依存症の患者も確実に増加している」と話すのは、成城墨岡クリニック院長の墨岡孝氏だ。「インターネット依存症」とは、インターネットの「メール」や「チャット」といったコミュニケーション・ツールに、極度にはまり込んでしまう症状のこと。墨岡氏の診療経験によれば、8年くらい前から、だんだんとインターネット依存症が増えてきているという。最近では、インターネットにはまり込んでしまった結果、ネット以外のことを犠牲にしたり、日常生活に支障をきたすようになるケースも少なくないそうだ。インターネット依存症は、パソコンにのみり込んでしまう、「テクノ依存症」と呼ばれるストレスの一種だ。日本では、職場にコンピュータが導入されるようになってきた1980年代前半ころから、テクノ依存症は問題になっていた。成城墨岡クリニックにも、以前から多くのテクノ依存症患者が受診していた。しかし現在では、このテクノ依存症の患者のほとんどが、インターネット依存症として来院するという。インターネットを始めた当初は、Webページを閲覧するネットサーフィンから入っていく。やり始めは面白くて、最初はのみり込んでしまうが、しょせんは見るだけのことなので、じきに飽きてそこで終わる。しかし、「それがメールやチャットの分野に入ってくると、その辺りから依存の問題が深くなってくようだ」と墨岡氏は指摘する。特にメールやチャット、匿名の掲示板は、パソコンを通して不特定多数の相手とやりとりを楽しめるため、飽きることがない。そうして、楽しんでいるうちに段々とネットにはまってしまい、職場から自宅に帰っても、食事はコンビニ弁当などで済ませて、すぐに自分のパソコンに向かってインターネットを始めるという例が非常に多くなってきているという。こうして、食事や睡眠、人との付き合いに当てる時間まで、ネットに費やすようになっていく。朝方までネットにはまり込むため、睡眠不足になり、職場に遅刻したり、欠勤したりするという問題も出てくる。ひどくなると会社に行かなくなり、“引きこもり”にまで発展することもあるという。また、ネット依存症に陥ると、胃潰瘍や高血圧、心筋こうそく、狭心症などの身体的症状や、パニック障害、過食症、不眠症などの精神症状が見られることもある。墨岡氏によれば、ネット依存症にかかりやすい年齢層は、大学生ぐらいから30代くらいまで。また男女別にみると、以前は圧倒的に男性が多かったが、今では女性の患者も増えてきた。それでも患者の3分の2程度は男性だという。性格的には、対人関係が苦手な内向的、それに加えてきちょうめんできまじめな人が多い。さらに論理的な思考を好む、いわゆるマニュアル型というか、理屈っぽい人がなりやすいという。インターネット依存症の原因となるメールやチャットは、匿名性の高いコミュニケーション・ツールだ。そのため、対人関係が苦手な内向的な人でも、ネットの中では雄弁な社交家になったり、普段なら言えない本音も言える。さらにネット上では名前や性別、職業も自由に変えられる。芝浦工業大学工学部助教授の春日伸彦氏によると、インターネット依存症の場合、現実の世界の自分と、インターネット上の

バーチャルな世界での自分の区別がつきにくくなっていくのが問題だ。その結果、ネット上で作り上げた自分の虚像を、現実世界に持ってきて、混同してしまうというケースも起こり得る。しかも、インターネット依存症の患者のほとんどは自覚症状がなく、自分自身は正常で何の問題もないと思っている。したがって多くの場合、家族や職場の同僚など、周囲にいる人が、遅刻の常習化や引きこもりなどの“異常”を問題視して、心療内科などに連れていき、初めて発覚するケースが多いようだ。インターネット依存症の治療の第一歩は、患者自身に「自分はインターネット依存症」であることを自覚させることにある。依存症から脱却させるためには、依存しているものから切り離すしか治療法はない。したがって、ネット依存症の場合は、コンピュータに向かう時間を制限するということになる。治療では、例えばスケジュール表を患者に作ってもらい、1日当たりのネットの使用時間を自分で決めさせたり、日記を書くことで、どのくらいネットを使ったかを自分で記録させたりする。こうした治療は、本人がネット依存症であることを自覚することができれば、比較的スムーズに進むという。というのも、もともとマニュアル思考を持つ人がなりやすいため、自分で立てたスケジュールなどは守れる人が多いからだ。後は、患者のスケジュールと日記をもとにカウンセリングを行う。最終的には仕事で使う以外は、ネットの使用時間を1日2時間程度に抑えるようにするのが理想だ。

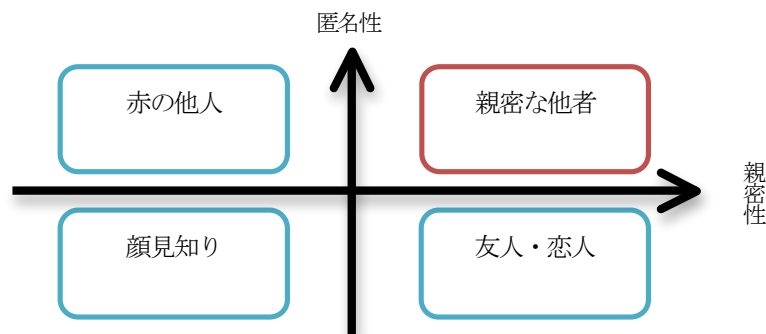
これらの記事からわかるようにネット依存症は人々の生活に支障をきたしている。特になりやすい人に大学生、男性、内向的、理屈っぽい人と挙げられていたが、これは私のイメージと一致していた。しかしその他の人も多くなっている。医学にまで発展しているこの症状をなんとかしなければならぬ。

### 3. ネット充

本題のネット充についてやっといこう。

#### (1) ネット世界の魅力

ネットコミュニティは複数の人をつないだ匿名で非同期なコミュニケーションのしくみである。参加者は互いに顔も見えず声も聞こえないし、知り合いではない場合が多い。特徴としては、①自分の好きな時間に閲覧や投稿ができて都合を優先することができること、②地位の平等化により他者の存在をあまり意識しない気楽なやり取りができること、③参加者とおしゃべりでだんだん親密になってくるとリアルな場所での会合が開かれる場合があること、である。この匿名の集まりであるネットコミュニティのなかでだんだんと親密な仲間意識が芽生えてくる（この親密な仲間意識を持った参加者のことを親密な他者という）。



ネット世界は親密なのに身の危険はないし、不快なことがあればいつでも抜け出せる。この気軽さが最大の魅力だと言える。つまり要点を整理すると、ケータイの登場で非同期のつながりが出現し、他人の都合をあまり意識せずとも自分の好きなときにどこでも連絡ができるようになった。また、文字のつながりにより、相手の顔や声の存在は消え、匿名によって、相手の名前や肩書きなどを気にする必要がなくなった。これにより、気軽にゆるく関係を持てることでコミュニケーションが盛んになった、ということだ。ここまではプラス面を述べてきたが、次にマイナス面もみてみよう。

#### (2) メール依存

私が参考にしてしている著書ではメール依存が例に挙げられていた。大学生を対象にしたアンケートでわかったことが友だちのメールにはすぐに返信するか、電波の届かないところにいると落ち着かないか、着信がないか一日に何度も携帯を確認するかという質問にすべてあてはまるメール依存の学生は全体の14%もいた。友だちがい

ないように見られるのは耐えられない、場違いではないかと気になることがある、悪口を言われているかもしれないと不安だ、という回答も気になった。これは、仲間からのけ者にされているのではないかとこの孤独感を解消するために頻りにメールのやり取りをしてしまうのだ。

ここまでネット依存について述べてきたが、私はネット依存の原因は人々の心情にあると気付いた。

### (3) 「居場所の社会学」

ここでは、阿部真大の「居場所の社会学」を参考に書く。

今の日本の中学生・高校生は部活や習い事などでとても忙しく、なかなか自由な時間をとることができない。それに比べ、大学生になると急に自由な時間が多くなり、何をすればいいのかわからないと悩む学生や、自由な時間が逆に重荷になっている学生もたくさんいる。つまり、モラトリアムの状態に戸惑っているのである。人は自由すぎる状態に耐えられない。自由に居場所を選ぶことができる時期(=大学時代)に居場所づくりを怠ると、居場所がなくなり不安定になりかねない。この著書の中で、居場所とはそれぞれが私を承認してくれる場所であると定義されている。人間社会の中では、それぞれの人との間でいくつもの私を作られる。そのそれぞれの私にはいくつもの役割が集積し、多層的になる。つまり、ひとりの中にいくつもの私が存在し、それぞれで役割は違うが、すべてが私でありどれも間違っていないのである。

だから、先に述べた「ネット依存症の人には大学生が多い」ことにも納得がいく。モラトリアムな大学時代に自分を承認してくれる場所が見つからず、ネットの世界へ迷い込む。そしてネットの世界での私を作られる。ネットの世界では自分で自分を作り上げられる上に、自分を認めてくれる人だけが最終的に残るため、非常に心地よい居場所ができあがる。この居心地の良さからネットの世界が自分の居場所になり、依存していくのであろう。以上のことを踏まえると、やはりネットの世界は1つの居場所なのかもしれないとわたしは思った。リアルの世界では言えないことをネットの世界で公表して、親密な他者に打ち明ける。そうすることで、心が軽くなったりすっきりしたりする。この快感を感じるためにネットに依存していくのではないかと。そしてネットに依存した人々はこのことに充実感を感じ、いわゆるネット充になっているのではないだろうか。

### (4) 認められたいの正体

上で居場所とは私を承認してくれる場所だと定義されていたが、ではなぜ人は誰かに認められたいと思うのか。承認には3種類のそれが存在する。親和的承認、集団的承認、一般的承認。そしてこの3つは、それぞれが完全に独立することはなく、相補的な関係として存在している。まず、親和的承認はわかりやすい例を挙げれば、子供に対する親からの承認。あるいは、恋人や親友からの承認。「ありのままの自分」に対する、基本的には無条件の承認。続いて、集団的承認。学校であり会社であったりする、その時々自分が属する集団からの承認。これは、その集団が共有する価値観に基づく条件付き承認であり、無条件な承認ではない。自助努力によって得られる承認、そう説明することも可能であろう。そして最後に、一般的承認。さきほどの2つのいずれとも異なる段階の他者、「社会的関係にある他者一般」からの承認となる。ありのままでもなく、自助努力によって得られるとも限らない、と言うと獲得が難しいようにも思えるのだが、あくまでも本書に拠るその正体は、「社会一般の人々が共通して認める普遍性(一般性)のある価値」に基づいた承認となる。

ネット世界に求められる承認は2つめの集団的承認かと思う。学校や会社からの承認をうまく受けられなくて、ネット世界での承認を求める。ここでは自由に自分を作り出せるので、ある意味自助努力によって作り出して得た承認だと言えるだろう。

このような承認を得られないと人は不安を感じる。承認不安を乗り越えるには、自分の価値観に合わない場面に出くわしたときにどのように考えるか、そこを見直してみると良い。集団的承認を得るために、自分の価値観には合わない集団的価値観に「無意識に」迎合しようとしていないか。自分の価値観と合わないことをしようとしているかを「自覚できるか」否かがポイントである。決して、常に自分の価値観を押し通して自分を通せ、という意味でもないし、集団に合わせて自らの自由を捨てろ、という意味でもない。自分の価値観と周りの価値観を比較し、どちらを選択するかを自分で納得した上で行動することが大事だ。自分の価値観にそぐわない行動をとったとしても、それは自分で納得した結果の行動であって自由を奪われている訳でもないし、もし望むのであればその価値観を自分の価値観に取り込んでも良い。

このように本書には書いてあったが、私はまさにこれがネットにはまっていく原因の1つではないかと考えた。

自分の価値観を選択してどちらかを捨てる際は誰かに言いたくなる。しかし、自分を知っている人にはなかなか言えないので、「本当の自分の価値観はこうだった」のようにTwitterやブログ上でつぶやいたり掲示板に投稿したりするのではないか。

#### (5) ウェブ時代をゆく

ネット世界の最先端を生きる若者たちは、すでにネットとリアルを区別しない。というより、「区別して理解しよう」と考えた瞬間にもう理解できなくなっている。もはや、ネットに住むように生きる人たちと、ネットをほとんど使わない人たちは二つの別世界を生きているとも言える。では、なぜネットでは好きなことへの没頭が続けられるのか。それは、リアル世界での生きづらさが原因である。知に対する自分の志向性を見出しても、物理的規約に縛られたリアル世界では「同好の士」を見出すことが難しくなった。しかし、リアル世界の有限性を超え、「不特定多数無限大」と対峙できるネット空間が現れ、関心を同じくする真の仲間を発見することができるようになった。お互いを深く理解する「同好の士」たちによって自らの達成が承認・賞賛されることは最も重要な喜びの一つに違いない。これがネットで好きなことへの没頭が続く理由であり、ネット依存になる理由である。

#### (6) 私とは何か

日常のいろんな場面で居心地の悪さを感じたときに、「場の空気」に合わせたキャラを演じることでその場を切り抜ける。そうしてあとで、あれは「本当の自分」じゃないと言い聞かせる。このように割り切ることで、「本当の自分」の価値を守ろうとする。キャラというのは演じられた自分であり、仮面というのは使い捨てのかりそめの顔である。私の中にはそれを演じている「本当の自分」があり、かぶっている仮面の下には素顔がある。それは相手も同様だ。だとすると、人間関係とはいったい何なのか。全部上っ面のものなのか。「ウソの自分」で付き合い続けたのか。相手も？いや、そうではない。

では、何度も出てくる「本当の自分」とは何なのか。キャラや仮面が表面的な「ウソの自分」ならどこかに「本当の自分」があるはずである。そもそも、私たちはキャラを演じ分けたりできるのか。その答えはできない。キャラは作っているわけではなく、自然に、無意識に、勝手にそうなる。例を挙げると、高校の友人と大学の友人との間では、なんとなく口調や態度、ノリが違う、なんてことはないだろうか。高校時代の自分の話を大学の友人にされるとなんとなくこっぴどかしくなる。それぞれでキャラを演じていたのか。いや、そうではなく、ただ、その環境にいるうちに自然とそうなったのだ。人間は対人関係ごとにいろんな自分を持っていて、それはすべて「本当の自分」だとすると納得できる。「私」の中には、複数の自分が同居しているのだ。

ネットの中では普段と違って、饒舌や毒舌になったり、楽観的やテンションがやたら高い人になったりと、別人のようになる人もいる。このような人たちを見ると、こっぴどが本当の姿なのかとよく考えられる。しかし、先ほど述べたように、人には様々な顔があり、ネット世界の自分も「本当の自分」だし、リアル世界の自分も「本当の自分」なのである。ネット世界の人格が「本当の自分」だと言われるのは、いつもと違う人格が可視化されてインパクトが強いただけなのだ。ネットで初めてこんな風にあからさまになったから、個人の持っているいろんな顔を、ウラの顔とか二重人格だとかいろいろとネガティブに詮索するより外なかった。逆に、言われる側としては、ほんの一部の私を本当の私と規定されるのも窮屈に感じる。確かに本当の私だが、他の私も本当であり、もっと別の顔もある。人は他者から本質を規定されて自分を矮小化されることが不安なのだ。

以上のことをまとめると、人にはいくつもの顔があり、相手次第で自然と様々な自分になる。自我（本当の自分）は一つだけで、あとはキャラや仮面（ウソの自分）にすぎないという考えは間違いである。人間は分人なのであると言える。

また、いろいろな人格はあっても、顔だけは一つだけしかない。あらゆる人格を最後に統合しているのが顔なのである。逆に顔さえ隠せば、複数の人格をバラバラなまま生きられるかもしれない。例を挙げると、指名手配犯。名前だけ知っていても、顔を覚えていなければ捕まりにくい。最近では指名手配されてから顔を整形手術して潜伏していた容疑者や、指名手配当時と顔や容姿が全然違う容疑者は、近くにいってもなかなかばれずに日常生活に溶け込んでいた。また、こんな話も聞いたことはないだろうか。全裸で名前も公開しているが顔が隠れている状態と、全裸で顔も公開しているが名前は公開していない状態、どちらが恥ずかしいか。これには前者のほうが恥ずかしいと答える人が多いようだ。顔が分かるから名前や個人につながる。匿名性よりも匿顔性と言え



る。

#### 4. リア充

##### (1) 概念 (wikipediaより)

2005年頃に2ちゃんねるの大学生生活板で成立しリアル充実組と呼ばれていたが、2006年初頭に今のリア充の形として使われ始めた。その後2007年夏頃からブログやtwitterでも流行した。

当初は、インターネット上のコミュニティに入り浸る者が、現実生活が充実していないことを自虐的に表現するための語だった。その後、このニュアンスは、従来のネット文化に触れていない、携帯電話を介したネットの利用者たちが流入するにつれ、彼らの恋愛や仕事の充実ぶりに対する妬みへと変化していった。

最近では“リア充=恋人持ち”という意味で使われる事が多いが、元々はネット活動をしている人間が現実世界で充実した生活を送るという場合に使われていたためこれは誤りがある。恋人持ちでも本人が充実していればリア充になりえる場合もあるが“=”ではない。ということで、実際リア充の定義はあいまいである。

##### (2) 「リア充」の先に見える人間関係 (<http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20070830/1002325/>より)

「アンサイクロペディア」の解説は“ネタ”にすぎないが、この解説の「さらにわかりやすいリア充判別」を読むと、あることに気づく。

以下の7つ以上チェックならリア充である。

- ・ 恋人が複数いる。さらにはうまく両立している。
- ・ アドレス帳登録数が200件以上。収まりきらないため携帯が2つある
- ・ 一日の平均メール数が10以上
- ・ ほぼ毎日なんらかの形で電話する。但し仕事を除く
- ・ 誕生日イベントによくからみ、ホームパーティーを計画する
- ・ 昼食や夕食を友人と食べることが多い
- ・ 一日に二回以上飲みがある
- ・ 月に1回は欧米や韓国に旅行する
- ・ 他の人に堂々と言える趣味がある(ライブ三昧・サッカー観戦等)
- ・ 将来に希望が見出せる

すべてのチェック項目で、(ケータイさえあれば)パソコンを必要としていないのだ。実はそこに、「リア充」の先にある、1つのトレンドが見える。明確な統計はないが、「mixi疲れ」やミニブログの流行から見るに「ネットも楽しいけど、本当は“リア充”がいい」という、ネットとリアルなすみ分けがネットユーザーの中で進んでいるのではないだろうか。「リア充」の行き着くところは、“リアル”は現実の人間関係で完成し、ネットの世界での友達とは現実生活に結びつかない、心の交流のような関係を築くということになりそうだ。

##### (3) リア充のSNSと言われるFacebook

ここまで、ネット世界の魅力の1つに匿名性を挙げていた。しかし、近年急激に利用者が増えているSNSのFacebookは、匿名性ではなく実名での登録である。なぜ実名なのにここまで利用されるようになったのか。また、投稿される内容は誰かと旅行に行つて楽しかったことや、何かを作つて満足したこと、何かを達成して嬉しかったことなどと、暗い内容はあまり投稿されない。まさにリア充のSNSだと思う。反対にTwitterでは暗い内容が多い気がする。この違いは何なのだろうか。

思うにフェイスブックでは、ポジティブな話題が主流で、「友だち」が多い人ほどその傾向は顕著である。つまり現実(リアル)の生活が充実している「リア充」ということだ。フェイスブックは全般的に前向きなマインドにならざるを得ない、ある意味での勝者・幸せのコミュニティーではないかと思う。そのコミュニティーにも、ヒエラルキー(階層社会)がある。そして、見ず知らずの人に「友だち」申請をできることは、ある程度自分のバックグラウンド(背景)に自信がないとできないものだ。一方で、簡単にアップできるツイッターは、不用意な発言が目立つことからネットでは「バカ発見機」などと揶揄(やゆ)されている。これは、短いコメントであり、タイムラインの中に埋没しがちな特性から「どうせ書いたって分かりやしない」「ちょっと目立つことを書

こう」と思うところが不用意発言を誘発しているのではないか。

このところのフェイスブックの「近況」には自分のダイエットエクササイズの記録や、ランニング距離の記録などをアップするアスリート系自慢も増えている。途中で更新が滞れば知人から理由を聞かれ、やめるにやめられない。逆にいえば、「近況」をお互いに認知し、頑張っている姿を褒め合うこともできるわけで、双方のアイデンティティーの確認になっている。ほかにも、人物診断のような外部アプリもあり、戦国武将、幕末の志士など、テーマは多種多様である。中には「それを見せていったいどうしろというのだ」というものもあるが、一ついえることは「さらけ出す自信のある自分がある」ということだ。これが、Facebookがリア充のSNSと言われる理由だろう。

##### 5. むすび：研究成果（私の主張）

最後にネット充とリア充の関係について論究しよう。最初に私が述べた、この2つは実は近い存在だという点だ。すぐ上に書いた記事に基づくと、自分はリア充だという人はネット充と併用はできないと考えている。しかし、小川克彦さんの「つながり論」によると意見は違った。ネット充の人はネット上で親密な関係を持つことでリアルも充実と感じるという考えだ。実際はどうなのかこれから考えていく。

あなたにとってネットのつながりはリアルのつながりに比べて薄いか濃いかというアンケートがある。結果は薄いが25%、濃いのが44%、薄くもあり、濃くもあるが31%だった。また、利用するサービスが増えれば、利用時間が増え、つながりが濃いと思うひとが増える。利用サービスが増えれば知人の輪も広がってやり取りする情報量も増え、結果的に濃いつながりと思うようになるのだ。つまり、ネット充の人ほど、つながりが濃いと感じるのである。

最初に、なぜあえて誰でも見ることができるネット上に自分の感情をさらけ出すのかと疑問を書いたが、これはネットがひとつの居場所であること、人には承認されたいという欲求があること、自分の違う人格も他人に知ってほしいこと、が結論だ。ネット特有の特徴がちょうどこの場にあてはまるのだ。この3つを強く思う人ほどネットにはまりやすい。

また、ネット世代は物心ついたときからネットが存在していたため、2つの世界が別々の世界と考えるほうが違和感あるのかもしれない。というより、リアルとネットとの境界線を引くこと自体がもう間違いであるのではないか。リアルの世界でもネットの世界でも、人は当然様々な人格を持っていて、場所ごとにいろいろな人格になり得る—ならざるを得ないからである。実際、ネットの世界のほうが本来の自分をさらけ出せるという人も少なくない。さらにネットの世界がきっかけでリアルの世界で出会う場合もある。ネットはリアルを包括しているといえる。

この2つの考えから私は、ネット充は非リア充ということではないと結論づけたい。確かに非リア充の人もいるが、両方確立している人も多くいる。リア充とネット充とはまた違う種類のもので、非相互関係である。

また、リア充とネット充は私たちのような若いネット世代にとっては近い存在であるが、ネット世代でない世代にとっては遠い存在であると思う。その時代の技術の進歩によってとらえ方は変わってくる。これからまだまだ技術は発達し、よりネットが身近になることだろう。よって、これから生まれてくる子どもにとってはまた違う存在になっていることだろう。これから生まれてくる子どもたちはどう呼ばれるのだろうか。それはわからないが、確実に今とは違う環境で、違うコンテンツで育つだろう。

最後に、今回は著書に頼り切って研究をしたので、まとめきれなかった部分がある。さまざまな意見があってそれぞれに納得してしまい、それをまとめるのが困難だった。今後はこの個人研究では触れることができなかった、「ネット恋愛」についてやっていきたいと思う。今回でネットの世界の特徴や魅力はよくわかったので、次は恋愛におけるネットの存在価値を研究したい。社会現象・問題にもなっている出会い系サイトやメル友、チャットから生まれる恋愛感情とは何なのか。恋愛という面だと、今までの捉え方とはまた違う考えや個人差などがあると思うので、じっくり進めていきたい。

<参考資料>

小川克彦（2011年）

「つながり進化論 ネット世代はなぜリア充を求めるのか」

中公新書2100

阿部真大（2011年）

「居場所の社会学」

日本経済新聞出版社

山竹伸二（2011年）

「「認められたい」の正体 承認不安の時代」

講談社現代新書

平野啓一郎（2012年）

「私とは何か 個人から分人へ」

講談社現代新書

梅田望夫（2007年）

「ウェブ時代をゆく ーいかに働き、いかに学ぶか」

ちくま新書

Nikkei BP net

<http://www.nikkeibp.co.jp/archives/389/389242.html>

<http://www.nikkeibp.co.jp/archives/389/389237.html>

日経トレンドィネット

<http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20070830/1002325/>

朝日新聞デジタル

<http://mantan-web.jp/2012/02/01/20120131dbg00r200029000c.html>